

5月を迎えるにあたって

代表取締役 三田雅憲

今月は、皆様もよくご存知の野村克也元楽天監督の著書『野村再生工場』から『フォア・ザ・チームの徹底』の項を紹介いたします。私も光栄プロテックが強い会社になり、利益をコンスタントに出していけるようにするためには、この気持ちが絶対なければいけないと思うのです。

“強い組織をつくるために、もう一つ徹底させなければならないのが『フォア・ザ・チーム』すなわちチーム優先主義だ。実は、当初楽天で苦勞したのもそこだった。というのはご承知のように楽天には近鉄の残党が多い。磯部について先に触れたが、磯部に限らず近鉄にいた選手は自分の記録をあげることを第一に考える選手が多いのだ。近鉄出身者だけでなく、最近は『まず自分が打つこと。それでチームに貢献したい』とか『自分が勝ち星をあげれば、それだけチームの成績も上る』といった発言をする選手が多い。特に弱いチームの中心選手に多く見られる。だが楽天のような弱いチームの選手がそういう考えで野球をやっているのは、勝てるわけがないのである。人間は自分がかわいい。だからどうしても個人成績が気にかかるのは当然だ。それに多くの球団は打率、ホームラン、打点、セーブ、防御率といった目に見える数字を元に選手を評価するから、給料を上げるためには記録を上げなければならない。弱いチームでは仕方のない面もあるし『自分が打つことがチームの勝利に貢献することになる』という考え方自体は私も否定しない。だが『自分が打つことが、勝利投手となることがチームのためになる』という考えと『チームのために打つ、勝つ』というのは、微妙だがあきらかに意味が違って来る。前者は個人記録優先主義、後者はチーム優先主義といっていいだろう。野球は、団体競技である。選手それぞれが自分の役割をしっかりと認識し、全うすることが一番大切だ。それが一丸となって戦うという意味に他ならない。各自がそれを忘れ、自分の記録のためにプレーしてしまえば、力が分散しチームは崩壊する。したがって選手は、記録よりチーム優先を考えて試合に臨むべきなのだ。すなわち『自分はチームのために何をすべきなのか、何ができるのか』を第一に考えなければならないのである。『自分の記録よりチームの勝利』することが大切であり、その結果記録も伸びるという型になるべきなのだ。だからといってチームは仲良し集団になってはいけない。弱いチームは往々にしてそうなりがちだ。ある選手がミスをしてベンチに帰ってくると控えの選手が『ドンマイ・ドンマイ』といって元気づけようとした。美しい光景に見えるかもしれないが、それを聞いた私は烈火のごとく怒った。『ミスを笑って許すとは何事だ。そんなだから同じ過ちを繰り返すのだ。傷をなめあうのは、アマチュアのすることだ。戦うプロ集団のすることではない！』いつしか人のプレーをめぐって選手同士で口論すら起きるようになった。そうしてそういうことが起きる事に比例してチームの成績も上っていったのである。では、いかにチーム優先主義を浸透させるのか。それはやはり人間教育が大切であると私は思っている。『人間の成長なくして技術的進歩なし』ミーティングで私は選手によく言う。『人間』という字は『人の間』と書く。これは『人の間にあってこそ、人のためになってこそ人間と呼べる』のだと私は理解している。『人』という字も人は支えあわなければ生きていけないことを示している。つまり『他人があってこそ自分』という謙虚な気持ちを持ってということだと思う。野球選手というのは、自分ひとりの力でここまでやれてこられたと考えがちだ。だがそんなことはありえない。他人からさまざまな恩恵を受けている。ピッチャーにしても、好リードをしてくれるキャッチャーやきちんと守ってくれる野手、コーチなどがあるから勝利投手になれる。自分の力だけで打った・抑えたというのは錯覚であり傲慢と言うしかない。選手はそのことを忘れてはいけない。だからこそ、監督や指導者は、選手が謙虚さや素直さを知らずにいるなら、きちんと教えなければいけない。己を過信しているなら、正さなければいけない。選手である以前に人間としての生き方を説いてやらなければいけないのである。選手一人ひとりのそうした意識が積み重なってこそ、真のフォア・ザ・チームの精神につながっていくからだ。”

ここで野村さんの述べられているチームは『会社』に置き換えられると思います。また野村さんは、こうも述べられています。

“心が変われば態度が変わる。態度が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。運命が変われば人生が変わる。”